

聖書
入門
コース



はじめに

本テキストを手にとられた方へ

「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。(ヨハネ 20:31)」

シャローム！

謹んでご挨拶を申し上げます。

「シャローム」とは、ヘブル語で「あなたに平安がありますように」という意味です。

今日、テレビやインターネットなどのメディアを通じて私たちが目にするニュースは、戦争や災害、疫病、SNSによる誹謗中傷など、暗いニュースばかりが目立ちます。私たちの多くは、不透明な将来に不安を感じ、知らず知らずのうちにストレスや心労に蝕まれています。私たちは本当の心の安らぎ(平安)を必要としています。

聖書は、本当の平安は、この天地を創造された神様から与えられるものであると語っています。本テキストを手にとられた皆さんの上に、私たちの主イエス・キリストの恵みと平安が豊かに注がれることを心よりお祈りしております。

さて、皆さんは聖書を読まれたことはありますか？

実際に手にとられた方も、本の分厚さや、一見難しく感じられる言葉の数々に圧倒され、読むにはハードルが高いと感じられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

このテキストは、聖書を読んだことのない方や、読んでみたいけれども読み方が分からないという方を対象に作成されたテキストです。「聖書とは何か?」「聖書のテーマとは何か?」「なぜ礼拝するのか?」などの基本的な事柄について学んでいきます。また、最後の学びでは、「神の子どもとして歩む」ことについて学んでいきます。

聖書は単なる書物ではありません。聖書は、神様が明確な意図をもって書き記された書物です。神様は、私たち一人ひとりの人生に特別なご計画を持っておられます。

「聖書入門コース」の学びを通して、皆さんが神様からのメッセージを受け取ることができるよう心よりお祈りしております。

聖書入門コース

Contents ●目次

はじめに	1
------------	---

第1回

「聖書とは何か？」

1. 聖書は世界で最も影響力のある書物です！	3
2. 聖書は神様からのラブレターです！（キリスト）	3
3. 聖書は預言書です！（神の国）	4
4. 聖書は契約の書物です！（契約）	4

第2回

「聖書のテーマとは？」

1. キリスト	5
2. 神の国	5
3. 契約	6

第3回

「なぜ礼拝するのか？」

1. 神様の目的は、私たちに祝福することです	7
2. 祝福の最たるものが礼拝です	7
3. 私たちは「イエスは主」と宣言し、神様に最高の礼拝を捧げます	8
4. 毎日の生活が礼拝です	8
5. 礼拝で多く用いられる用語	8

第4回

「神の子どもとされるには？」

1. すべての人は罪を犯しました	9
2. イエス・キリストが私たちの罪のために十字架で罪を背負われました	9
3. イエス様を信じるなら救われます！	10
4. イエス様を信じるすべての人は、神の子どもとされます！	10

第1回「聖書とは何か？」

聖書は単なる宗教の経典ではなく、倫理・道徳の本でもありません。聖書は神様のことばです。私たちの人生の手引書ということもできるでしょう。

第1回の学びでは、「聖書とは何か？」を一緒に学んでいきましょう。

1. 聖書は世界で最も影響力のある書物です！

(1) 発行されています

世界で年間2億冊余りが発行されていると言われています。

(2) 翻訳されています

既に2000以上の国の言葉、方言、部族語に翻訳されています。

(3) 迫害されてきました

迫害の理由は多岐に渡りますが、聖書は唯一まことの創造主なる神に従うことを教え、神の前ではすべての人は平等であると教えていることから、支配者たちにとっては都合が悪く、嫌われたのかもしれない。

(4) 人類に影響を与えてきました

聖書は人類の歴史・思想・哲学・法律・政治・文化などに影響を与えてきました。多くの国の法律の基礎となっています。

2. 聖書は神様からのラブレターです！（キリスト）

(1) 神様は私たち一人ひとりを愛しておられます

聖書は、「初めに、神が天と地を創造した。(創世記1:1)」という一節から始まります。すべてを創造した唯一まことの創造主が存在し、この神様が私たち人間を神のかたちに創造されました(創世記1:26-28)。神様は私たち一人ひとりをよくご存じで、私たちを愛し、私たちの人生に素晴らしいご計画を持っておられ、私たちの人生に関わりたいと願っておられます(エレミヤ29:11)。

(2) 神様の愛を最も象徴するものは、救い主イエス・キリストです

人間は本来、神様と交わり、神様の愛を受け、神様の計画と調和して生きる者として創造されましたが、すべての人は神から離れ、自分勝手な道へと進みました。聖書の「罪」とは「的外れ」を意味します。神様に背を向けた人間は、この「罪」のために神様に届くことができなくなってしまいました。そこで、神様の側から私たちを救おうと遣わしてくださったのが、イエス・キリストです。神様は、そのひとり子であるキリストを遣わされるほどに私たちを愛してくださいました(ヨハネ3:16)。キリストは私たちの神様に対する反抗という罪を背負い、私たちの身代わりとして十字架で死なれました。すべての人は、キリストによって「罪」からの解放を受け、神様の愛を頂くことができます。

聖書は神様の靈感(特別な啓示)を受けた約40人の記者によって執筆されました

が、本当の執筆者は天地万物の創造主である神様ご自身です。聖書はイエス・キリストを救い主として信じさせ、信じる者に永遠の命を与えるために書かれました(ヨハネ 20:31)。イエス様を信じるすべての人は、神様の子どもとされ、神様の家族として歩むことができます！

3. 聖書は預言書です！（神の国）

聖書を一言でいうと、「預言書」です。俗にいう「予言」とは異なります。予言とは、未来を予測するという言葉で、漠然としたものであり、迷信的なものです。ノストラダムスの大予言が有名ですが、占いも予言の一つと言えるでしょう。一方、「預言」とは、神様から預かった言葉を指します。神様は、何百・何千年も前からご自分の計画や考えを預言者に教え、それを記録させ、後の人々が実際の歴史と照らし合わせて調べることができるようにしたのです。

聖書が神様のことばであると信じる最大の根拠は、聖書の預言が成就したことです。聖書最大の預言はキリストに関するものです。イエス・キリストは約 2000 年前に生まれましたが、その誕生は何千年も前から聖書の中で詳しく預言されています。いつ、どこで、どのような生涯を送り、何のために、どのような死に方をするのか、事細かに記されているのです。歴史上、生まれる前からその生涯が預言されていた人物は、イエス・キリスト以外にはいません。

また、聖書にはキリストが王として治める神の国の回復が預言されています。そして、この地に神の国を回復するために神様が選んだユダヤ民族(イスラエル)に関する預言が記されています。紀元 70 年、ローマ帝国によってエルサレムは陥落し、ユダヤ民族は約 1900 年もの間世界中に離散しますが、1948 年に国家が再建されました。驚くべきことに、聖書では何千年も前からユダヤ民族の世界離散とイスラエル国家の再建が預言されていたのです。

4. 聖書は契約の書物です！（契約）

聖書は旧約聖書 39 巻、新約聖書 27 巻の合計 66 巻から構成されています。旧約聖書はヘブル語で書かれ、新約聖書はギリシャ語で書かれました。執筆時期は旧約聖書が紀元前約 1500～400 年頃、新約聖書が紀元約 50～100 年頃です。

また、旧約・新約の「約」という言葉は、契約・約束を意味します。聖書は神様と人間との契約の書物です。旧約聖書が古い契約であり、新約聖書が新しい契約であるというわけではありません。旧約聖書はイエス・キリストが地上に誕生する以前の書物、新約聖書はそれ以後という意味で区切られています。旧約聖書・新約聖書ともに、今日も有効な神様と人間との契約であり、約束なのです。キリストが王として治める神の国は、契約を通して実現されます。

第2回「聖書のテーマとは？」

第1回では「聖書とは何か？」を学びました。今回の学びでは「聖書のテーマ」を学んでいきます。聖書はキリスト・神の国・契約という三つのテーマで書かれています。その一つ一つを一緒に見ていきましょう。

1. キリスト

キリストは、ギリシャ語のクリストス(油注がれた者、権威者)という意味で、誰が主権者であり王であるのかということが聖書最大のテーマです。この世界は、キリストによってキリストのために造られました(コロサイ 1:15)。聖書の全書簡がキリストについて語り、歴史はキリストによって導かれ、完成します。

前回の学びの中で、旧約聖書はキリスト以前の書物であることを学びましたが、旧約聖書 39 巻のどの書簡にも、キリストは様々な形で現れています。また、新約聖書の中では、イエス様ご自身も「聖書が、わたしについて証言しているのです。」と語っておられます(ヨハネ 5:39)。

聖書は「キリスト」を焦点に合わせて書かれ、神様の計画は「キリスト」の来臨に向かって展開していきます。キリストは、約 2000 年前に人間の姿となってこの地上に来られ、私たち人類の罪のために、十字架の上で死ぬことによる贖いを完成されました。

驚くべきことに、キリストは「死」で終わることがなく、死んで 3 日目に復活されました。キリストの復活については、500 人以上の人が目撃したと言われています。聖書はキリストの復活についても何百年も前から預言していました。キリストの復活をお祝いするのが「イースター(復活祭)」です。

キリストは復活後、40 日間にわたって弟子たちに姿を現された後、天に昇りましたが、聖書ではこの世界の終わりの時に、もう一度キリストがこの地に戻って来られることを預言しています。聖書の預言は、再臨の「キリスト」によってすべて成就します。キリストは、「契約」を成就し、「神の国」を完成されるお方なのです。

2. 神の国

「神の国」とは、ギリシャ語で「支配、統治」を意味するバシレイアという言葉が使われています。「神の国」とは神の支配、神の主権、神が統治する権威を指します。神様の支配の行き渡っている場所、それが「神の国」です。

聖書は旧約聖書の最初の書簡である「創世記」から新約聖書の最後の書簡である「黙示録」に至るまで、一貫して「神の国とその回復、完成」を語っています。聖書はこの地上に対する「神の国」の回復のストーリーであり、そのためにイスラエル(ユダヤ民族)が選ばれました。

また、聖書は「神の国」と「サタン(悪魔)の国」の戦いの歴史でもあります。神は最初の人アダムを「エデンの園」に置かれ、地上のすべての生き物を支配する権威を与えました。

エデンの園は、神が創造された完全な世界であり、神の国の原型です。しかし、アダムが神に反逆したため、神の国は失われ、罪と死が支配する「サタン」の国が地上に始まります。神は、キリストによってこの地上に神の国を回復するために、一人の人アブラムと永遠の契約を結び、その子孫であるイスラエルを通して、神の国の福音を全世界に広げようといわれました。

聖書はイスラエルの歴史を通して「神の国」のひな型を示し、キリストが地上を歩まれた時には、キリストがおられる所に神の国が現されていました。

現在においては、神様の選びの民イスラエルと教会を通して、神の国がこの地に現されています。そして、キリストが再びこの地に戻って来られる時、イスラエルと教会は一つにされ、神の国が完成します。

3. 契約

聖書は創世記から黙示録まで、契約の中で展開する契約の書です。「神の国」の計画はすべて契約によって展開し、成就します。前回の学びでは、旧約・新約の「約」が、契約・約束を意味していることを学びましたが、これは「契約」が聖書のテーマを表しているためです。

神様が与える契約は、英語では「カベナント Covenant」という言葉が使われており、人間同士が結ぶ契約の「コントラクト Contract」とは明確に違う言葉が使われています。聖書は、神様が人と自然との間に結ばれた契約の書です。

契約は神様の愛と義に基づいているため、聖書の神は契約の神といえます。人間がどれほど不忠実であっても、神様は契約通りに人と歴史を動かし、神の国を完成されます。神様は恵みとあわれみに満ちたお方なのです。

聖書の契約は、聖なる神が主導権を取って結ばれるものであり、それは厳粛であり、決して変わらない永遠のものです。譲歩や妥協はなく、すべてが必ず成就されます。イスラエルは「契約の民」とされ、イスラエルから見た私たち異邦人も、キリストを通して「新しい契約(※)」の中に入れられ、「契約の民」とされる恵みにあずかりました。

(※)それぞれの契約が、聖書のどこに書かれ、どんな内容であり、いつ・どこで・誰と誰の間で結ばれた契約なのかの詳細は、「聖書の三つのテーマ」のテキストで詳しく学ぶことができます。

第3回「なぜ礼拝するのか？」

クリスチャンは、毎週日曜日に教会に行き、創造主なる神様に礼拝を捧げます。「なぜ毎週礼拝する必要があるのか？」と疑問を持たれる方もいらっしゃるでしょう。今回の学びでは「礼拝の意味」について学んでいきます。

1. 神様の目的は、私たちに祝福することです

天地万物の創造主である神様はご自身の姿に似た存在として私たち人間を創造されました。神様は愛される存在として私たち一人ひとりを創造され、私たちに祝福で満たし、私たちが祝福されることを通して、地上のすべての生き物にもその祝福が及んでいくように計画されました(創世記 1:26-28)。

神様は、この地上に「神の国」を回復するために、イスラエルの祖先であるアブラハムを選ばれたことを前回学びました。神様はアブラハムとの間に永遠の「祝福の契約」を結ばれ、地上のすべての民族を祝福しようとご計画されました(創世記 12:1-3)。アブラハムに約束された祝福は、その子孫であるユダヤ民族(イスラエル)に及び、そして、今日では「イエスは主」と信じるすべての者の上にも与えられています。

神様と私たちの関係は、親子関係に似ています。イエス様も、神様を「お父さん」と呼んでいます。神様は遠くにいて近づきがたい存在ではありません。親と子どものような親しい関係を築きたいと神様は願っておられます。親は子どもに対して最上のものを与えたいと願うものです。神様は私たちが愛するがゆえに、私たちに祝福したいと願っておられるのです。

2. 祝福の最たるものが礼拝です

父なる神様は、私たち人間も神様を愛する存在となって欲しいと願っておられます。イエス様ご自身も、聖書の中で最も大切な教えは何かという問いかけに対し、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と答えられました(マタイ 22:37)。私たちの持てるすべてをもって主なる神様を礼拝することが最も大切であると聖書は語っています。

私たちは義務感によって神様を礼拝するものではありません。まず、神様が私たちが愛してくださったので、その愛への応答として、私たちは神様に礼拝を捧げます。「礼拝」とは、神様に最高の価値があることを表し、神様の前に「ひれ伏す」ことを意味します。それは、神様の前に謙遜にへりくだり、「イエス様が私の主です」とイエス様の主権を認めることです。旧約聖書が書かれたヘブル語では、「ひれ伏す」と「祝福」の語根は同じ言葉が使われています。神様の前に礼拝を捧げることは、私たち人間に与えられた最高の祝福なのです。

3. 私たちは「イエスは主」と宣言し、神様に最高の礼拝を捧げます

「礼拝」は教会で最も大切にされているものの一つです。『「イエスは主」と宣言する礼拝と祈り』が捧げられることが、私たちの教会のヴィジョンです。

神様は天地万物を6日間で創造され、7日目にすべての働きを休まれました。それゆえ、神様は7日目を「安息日」「聖なる日」と定められ、私たち人間が安息日を守り、この日を聖なる日とするように命じられたのです。「聖なる日」とするとは、取り分けること・分離することを意味します。仕事やプライベートでどんなに忙しかったとしても、「安息日」は神様と過ごすために特別に取り分け、聖別するように教えられているのです。

このような聖書的背景から、私たちの教会では、日曜日を「聖なる日」として聖別し、週に一度「聖日礼拝」と称して神様の前に礼拝を捧げています。「安息日」は神様が私たちに与えてくださった特別な賜り物です。週に一度、愛する神様との憩いの時間を聖別して過ごすことで、私たちの身体と魂に休息が与えられ、神の国の中で新しい1週間を生きていくための力が与えられます。

4. 毎日の生活が礼拝です

聖書は、日曜日だけでなく、毎日の生活そのものが神様への礼拝であると教えています。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。(ローマ 12:1)」

学校で勉強することも、職場で働くことも、食べることも、飲むことも、眠ることでさえも、すべてが神様への礼拝です。神様は私たちの人生を祝福したいと願っておられ、私たちの生活のあらゆる領域に関わりたいと願っておられます。

神様は私たちといつもともにおられるお方です。私たちが神様を意識して歩む時、私たちは神の国の祝福を体験して生きることができます。聖書のみことばを土台として生きることが神様への捧げ物であり、神様への礼拝です。これこそ、神様が私たちに与えてくださった祝福であり、恵みなのです。

5. 礼拝で多く用いられる用語

礼拝に参加されると、「ハレルヤ」「アーメン」「感謝します」という言葉をよく耳にします。「ハレルヤ」は、ヘブル語で「神様をほめたたえます」という意味です。「ハレルヤ」と主に叫ぶことは、「主なる神様を賛美し、礼拝します」と宣言することを意味します。また、「アーメン」は「本当にその通りです」という意味です。賛美リーダーや説教者がみことばを宣言する時や、神様への祈りが捧げられる時に、「アーメン」と応答することを通して、神様への信仰を表します。「感謝します」は、「すべての事について、感謝しなさい。(Iテサロニケ 5:18)」という聖書のみことばに由来したもので、イエス様が私たちのためにしてくださったことのゆえに、神様に心からの感謝を捧げます。

第4回「神の子どもとされるには？」

最後の学びでは、「神の子どもとして歩む」ことについて学んでいきます。

1. すべての人は罪を犯しました

神様は、私たちを愛される存在として創造されました。神様の目には、私たちは高価で尊い存在であり(イザヤ 43:4)、私たちの人生には希望に満ち溢れた計画が用意されているのです(エレミヤ 29:11)。

創造主である神様は、最初の人アダムを「神のかたち」に創造し、造られたすべてのものを「非常に良かった」と宣言され、アダムをエデンの園に置き、彼と契約を結ばれました。その内容は、アダムが主の命令に従うことでいのちと祝福が与えられ、従わなければ死ぬというものです。アダムは、自分の後に続く全人類を代表して、神様と契約を結びました。そのため、アダム一人がしたことは全人類がしたことになります。

神様はアダムに自由を与えられましたが、一つだけ禁止事項を作ります。園の中央にある「善悪の知識の木」からは取って食べてはならないというものです。神様は、「この木から食べたら必ず死ぬ」とアダムに重大な警告を与えます。それは神様から離れる自由を与えることであり、人々に対する神様からの信頼でもありました。しかし、アダムは神の命令を守ることができず、善悪の知識の木の実を食べてしまったので、人類に罪と死の呪いが入り込んでしまう結果となりました。つまり、罪とは神様との関係を断って生きることそのものです。

2. イエス・キリストが私たちの罪のために十字架で罪を背負われました

アダムが神様に背いたことにより、私たちは神様の愛と計画を受け取ることができなくなりました。

しかし、恵みとあわれみに満ちておられる神様は、私たち人類を見捨てることはせず、人類の救済計画を発動されます。それがイエス・キリストでした。神様は、そのひとり子であるイエス・キリストをこの世に遣わし、この方によって救いをもたらそうと計画されたのです(創世記 3:15)。

イエス様は、聖霊によって処女マリヤの内に身ごもり、罪のないお方としてこの地にお生まれになりました。最初の人アダムは失敗してしまいましたが、イエス様はただ一度の罪も犯すことはありませんでした。

旧約聖書の時代では、人が犯した罪の赦しを受けるためには、自分の罪の身代わりとして羊や牛などの動物を殺して、神様の前にいけにえとして捧げる必要がありました。罪の代価として命(血を流すこと)が必要とされたのです。

何の罪もない神のひとり子であるイエス様が、私たちの身代わりとして十字架につけられて殺されました。それは、私たちの罪の代価として命をささげ、また、その刑罰を代わりに受けるためだったのです。ここに、神様の大きな愛が示されました(Iヨハネ 4:9-10)。

3. イエス様を信じるなら救われます！

イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架にかかり、死んで葬られました。しかし、死んでから 3 日目によみがえられました。イエス様が、罪と死の呪いを打ち破ってよみがえられたことにより、私たちの目の前に、新しい生ける道が開かれたのです(ヘブル 10:20)。

イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ 14:6)」と宣言されました。すべての人は、イエス様によって、罪と死の呪いから解放され、神様の愛を頂くことができます。

聖書が私たちに求めていることは、「イエス・キリストこそ私の主です」と信じ、告白することです。私たちは、良い行いによって救われるのではありません。私たちには、既に定められた神様の救いの計画の応答として、信仰によってキリストを受け入れることが求められています。イエス様を信仰によって受け入れるとは、それまでの神様を意識しない「自己中心」の歩みから、神様を中心とする歩みへと方向転換することです。イエス様を「私の主」として私たちの内側にお迎えする時、私たちはイエス様にあって全く新しい存在として造り変えられるのです(Ⅱコリント 5:17)。

4. イエス様を信じるすべての人は、神の子どもとされます！

イエス様を信じるすべての人は、神様の子どもとされ、神様の豊かさが満ち溢れる神の国(教会)の家族として、神様の素晴らしさを体験し、その体験を分かち合う恵みにあずかることができます。

神様は、私たちが母の胎内に形造られる前から、一人ひとりに特別でユニークな計画を用意しておられます。神様は、私たち一人ひとりを祝福したいと願っておられます。そして、私たちが祝福されることを通して、私たちの周囲の人々が祝福されていくことを願っておられるのです。「イエスは主」と応答することを通して、私たちの創造主である神様が願われている人生を歩むことができます。

神様を意識しない歩みから神様を中心とする歩みへと「方向転換」をしたいという願いがあるならば、神様が助けてくださいます。イエス・キリストを「私の主」として歓迎し、この方とともに新しい人生を歩んでいこうではありませんか。



表紙のデザインは、エルサレム旧市街にあるクライストチャーチのステンドグラスを参考にしています。
イスラエルを通して全世界を祝福するという神様が与えた契約を、オリーブの木の根と幹、栽培種の枝であるユダヤ人(メノラー)で表し、イエス・キリストによってそこに接ぎ木された野生種の異邦人クリスチャン(十字架)を表しています。

イエス・キリストが再びこの地に戻って来られるとき、イスラエルと異邦人の救いは完成し、すべてのものはキリストにあって一つとされます。

(聖書参照箇所：創世 12:1-3、ロマ 11:11-24、エペ 2:11-22 他)